

活動報告

観光研究情報室

「第25回旅行動向シンポジウム」を開催！

毎年、研究成果の発信を行う場として開催してきた「旅行動向シンポジウム」も、25回目を迎えました。



今年度は10月23日（金）に開催し、定員の100人を超える137人の方にご参加いただきました。告知開始からわずか2日ほどで定員に達し、その後も多くのお問い合わせをいただくなど、観光に対する関心の高さがうかがえました。

参加者の職種としては、「旅行会社・民間（宿泊・交通）」（28・5%）が最も多く、次いで「行政」（14・6%）、「報道・出版」（10・9%）、「観光関連団体」（10・2%）、「研究者」（7・3%）、「その他」（28・5%）という内訳となりました。

今年度は「旅行年報2015」に焦点を当て、「日本人の旅行市場」「観光産業」「観光地」「観光政策」「訪日外国人の旅行市場」について各項

■開催概要

第25回旅行動向シンポジウム

- ・開催日時：平成27年10月23日（金）15:00～17:30
- ・参加費：無料
- ・場所：大手町サンスカイルーム
- ・参加者数：137人
- ・主催：公益財団法人日本交通公社

◎プログラム

我が国の旅行・観光の動向

～『旅行年報2015』より～

●プレゼンター

「日本人の旅行市場」

五木田 玲子（観光文化研究部 主任研究員）

「観光産業・観光地の動き」

守屋 邦彦（観光文化研究部 主任研究員）

堀木 美告（観光政策研究部 主任研究員）

質疑応答・休憩

「観光政策」

牧野 博明（観光政策研究部 主任研究員）

「訪日外国人の旅行市場」

相澤美穂子（観光政策研究部 主任研究員）

徐 中 芃（観光政策研究部 客員研究員）

質疑応答

目の執筆責任者よりご報告し、中間と最後に質疑応答の時間を設けさせていただきました。ご形としました。

『旅行年報2015』は直近約1年の旅行・観光の動向をテーマ別に取りまとめたものですが、既存の統計資料に加え、「JTB F旅行実態調査」「JTB F旅行需要調査」「都道府県及び政令指定都市の観光政策に関するアンケート調査」「DBJ・JTB Fアジア8地域・訪日外国人旅行者の意向調査」「訪日団体旅行



商品調査」といった、当財団独自の調査結果などを加えて分析している点特徴でもあり、今回のシンポジウムでもその結果を中心に報告しました。

図1 当シンポジウムに期待していたこと (複数回答)

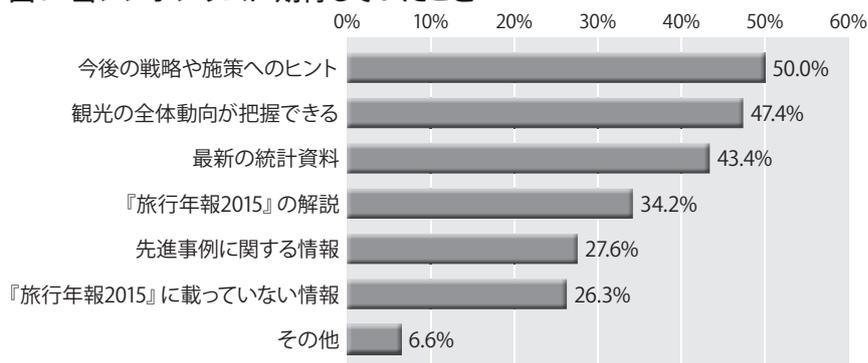
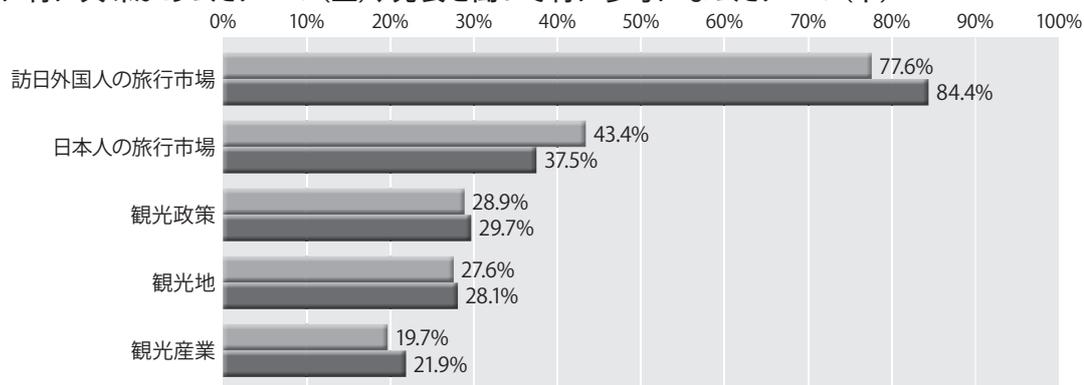


図2 事前に特に興味があったテーマ (上)、発表を聞いて特に参考になったテーマ (下) (複数回答)



参加者アンケート結果より

参加者アンケートの結果 (回収数76、回収率55・5%) を一部ご紹介いたします。

当シンポジウムに期待していたこととしては、「今後の戦略や施策へのヒント」(50・0%) が最も高く、次いで「観光の全体動向が把握できる」(47・4%)、「最新の統計資料」(43・4%) が続きます(図1)。「今後の戦略や施策へのヒント」については、特に観光関連団体や旅行会社・民間の方々からの期待が高く、「観光の全体動向が把握できる」については特に研究者の方々からの期待が高い結果となりました。

シンポジウムに参加する前に特に興味があったテーマとしては、「訪日外国人の旅行市場」(77・6%) が最も高く、全ての職種において1位を占めています。次いで「日本人の旅行市場」(43・4%)、「観光政策」(28・9%) が続きます(図2)。

実際に発表を聞いて特に参考になったテーマとしては「訪日外国人の旅行市場」(84・4%)、「日本人の

旅行市場」(37・5%)、「観光政策」(29・7%)と続きます。

シンポジウム全体の評価としては、「良かった」(61・3%)、「大変良かった」(36・0%)、「あまり良くない」(2・7%)と続きます。「重要な点がコンパクトによくまとまっていた」「資料が充実していた」といったご意見の他、「もう少し内容を掘り下げた解説もしてほしい」「テーマ別の分科会などがあってもよい」といったご意見もいただきました。

皆様からいただいたご意見を参考に、次年度以降もさらに有益なシンポジウムにしていきたいと思っておりますので、ぜひご期待ください。

なお、『旅行年報』の内容は以下URLよりダウンロードできますので、ぜひご利用ください。

<https://www.jtb.or.jp/publication-symposium/annual-report>

(観光研究情報室 福永香織)

第5回「たびとしょ Café」を開催

「旅の図書館」では、9月29日(火)に5回目となる「たびとしょ Café」を開催しました。

今回は「旅の図書館」一時閉館にあたっての謝恩特別企画とし、フリーアナウンサーの青山佳世氏をお招きしました。テーマは「日本の田舎(NAKA)」は宝物〜当たり前の再発見と価値づくり〜。研究者や学生に加え、いつも「旅の図書館」をご利用いただいている方や民間企業の方など、31人の方々にご参加いただきました。

青山氏はNHKのおはよう日本「季節の旅」で全国各地を旅してこられた経験から、観光、地域づくり、河川、道路、交通、環境、森林などをテーマに幅広く活動されています。「季節の旅」の撮影秘話などもご紹介いただきましたながら、日本の原点でもあり宝でもある「田舎」の魅力は次世代に引き継いでいくために必要なことを再認識する場となりました。

今回はお話しくださった雰囲気を感じていただくため、いくつかのテーマを抜粋し、講演会スタイルでご紹介します。



青山佳世(あおやま かの)氏

愛知県生まれ。商社勤務後、フリーアナウンサーに。平成元年からNHKの番組を担当し、おはよう日本「季節の旅」で226カ所を取材した他、全国800カ所を旅する。他に観光、地域づくり、川、道、交通、環境、森林などをテーマに市民の立場から幅広く活動。朝日ニュースキヤスター政策対談「明日への架け橋」(内閣府広報番組)キャスター。これまで国土交通省「交通政策審議会」委員、総理主催の「観光立国懇談会」委員、中央防災会議専門委員、元林野庁「林政審議会」委員、バイオマス日本総合戦略アドバイザー「グループ委員、消防庁「今後の消防体制のあり方検討会委員」などを歴任。現在も総務省「消防審議会」委員、文部科学省「大学設置・学校法人審議会」委員、「日本中央競馬会」経営委員(13年9月)、「自動車検査法人」理事(非常勤)(14年7月)、「空港施設株式会社」社外取締役(15年7月)など公職多数。著書に「旅で見つけた宝物」(文藝春秋)がある。

青山氏による話題提供

○「季節の旅」から得た人生訓

NHKの番組「季節の旅」は、いわゆる観光名所を紹介するような旅番組ではなく、聞いたことがないようなまちやむらに行き、その人たちとお話をして、その土地ならではの

【お話のテーマ】

- NHKおはよう日本「季節の旅」のエピソード
群馬県みなかみ町(旧新治村 湯宿温泉)、神奈川県横須賀市(子安の里)
- ようやく一体的に議論できるようになってきた「交流」と「観光」
- 北海道美瑛町「パッチワークの丘」の風景を支えているもの
- 長野県伊那市「芝桜の富士山」自分たちの楽しみと来訪者へのおもてなし
- 徳島県上勝町「葉っぱビジネス」ベレットやバイオマスを活用した環境に優しい村づくり
- 活動や魅力を点から線へ、線から面へ広げる「日本風景街道」
- 日本の宝物としての「田舎」の魅力と課題
- 森林と林業を取り巻く実態 森林ボランティアからバイオマス発電まで 都心にいながら応援できる森づくり
- 若者の定住と継続的な支援体制を促す「地域おこし協力隊」
- 北海道の新冠・日高 サラブレッド銀座の風景を支える競馬
- かつてない外国人観光客の来訪 今こそ原点に立ち返り来訪者に満足していただける魅力づくりを

の美味しいものや風習などをご紹介するというコーナーでした。田舎と縁がなかった私にとって、旅の魅力や田舎・地方の重要性を感じ取るこゝろができた極めて大切な番組でした。番組の中ではなかなか表現できませんでしたが、良い所はたくさんあっても、それを守っていくのがどれだけ大変か、多くの課題に気がつきました。

ある時、湧水を飲むというシーンがありました。湧水のおいしさをどう表現してよいか悩んでいましたが、地元の方が飲んだ後におっしゃったことは「いつもは喉にまるやかなんだけど、今日はなんだか刺激があるなあ。こういう時には山の奥で、山崩れとか何か異常があるんだ。」ということでした。

山にはある程度の方が住んで、いつも山の表情を見たり、山の手入れをして安全を守ることが大切で、山崩れや、大雨が降って下流域で大きな洪水が発生しないためにも、上流部がしっかりしなければいけない。20年前の本当に一瞬の出会いでしたが、それは私の人生訓になりました。

○「パッチワークの丘」の魅力が保たれている理由

北海道美瑛町のパッチワークの丘は、四角く区画整理された畑に小麦やジャガイモなどのさまざまな農作物を作っているのでパッチワークのような彩りになっています。しかし、連作障害があるので同じ畑に同じ作物を作り続けられないため、あの模様は毎年変わると聞きました。私たちが行くたびにパッチワークの美しい風景に心惹かれるのは、美瑛町の農業がしっかりとしているからというところが分かったわけです。



パッチワークの丘の魅力を増す 赤麦の復活へ(北海道美瑛町)



この風景が一躍有名になったのは、写真家の前田真三さんが撮られた「麦秋鮮烈」という作品で、パッチワークが赤麦で真っ赤に染まった風景です。ところが、小麦の品種改良が行われて赤麦はなくなってしまいました。真っ赤に染まるパッチワークの丘をイメージして来てくださる観光客の皆さんに申し訳ないと、美瑛の有志の方たちが赤麦の復活にかけ、小麦農家を訪ねて赤麦を復活

させてくださいと頼んで回りました。栽培方法もほとんど分からなくなっていたので、本当に試行錯誤だったそうです。しかし、農家の方々もボランティアで何年も続けられませんでしたので、まず赤麦を栽培してもらっために赤麦の使い道を考え、赤麦を使ったパスタ料理を作ってくれるイタリア料理店や、赤麦を使ったビールを造ってくれるところを探しました。さらには売る先が必要になりますので、都会の方々に会員になって買ってもらう仕掛けを作っていました。多くの元気な農家の方たちがいることと、美しいパッチワークの丘を守るために一緒になっているいるなことを考えている人たちの力が結集して、あの風景が維持され、何年経った今でも飽きられることなく魅力を保ち続けていたのです。

○「日本風景街道」で目指す、面としての魅力づくり

各地域でさまざまな地域づくりが行われていますが、ある程度広範囲に魅力がないと私たちが行くきっかけにはなりませんよね。

2005年に始まった「日本風景街道(シーニック・バイウェイ)」は、今まで点としてあった魅力や活動、道を通して線であって、さらに面に広げていきたいと思います。現在、全国で136ルートが登録されており、清掃活動、花壇整備、案内板整備、ガイド育成、マップ作成、広報活動などさまざまな要素を組み合わせた取り組みが行われています。

ただ、これは補助金事業ではないので予算がほとんどありませんでした。本当にやる気のあるところはその後一生涯命取り組みをしましたけれども、予算獲得のために手を挙げてきた地域は活発ではありません。補助金目的は、「日本風景街道」の趣旨にはなじみませんが、活動するには資金が必要なことも事実です。

そこで、国土交通省道路局も、社会資本整備総合交付金といった他の交付金や補助金を合わせてこの活動をサポートしていこうとしています。先ほどの美瑛もそうですが、多くの地域が「日本風景街道」の「環で地域づくりの活動に参加しています。

森の恵みに感謝

山が荒れる

- ・水をはぐくむ
- ・国土保全
- ・生物多様性保全
- ・癒やしーフィットンチット
- ・森林セラピー
- ・おいしい空気(酸素) 二酸化炭素吸収

- ・安い外材が主役
- ・木材価格の低迷
- ・林業衰退
- ・山村の高齢化
- ・後継者不足
- ・山の手入れをしない
- ・山が荒れる
- ・土砂災害

○多様な形で担う林業

森には生物多様性の保全、癒やし、国土保全などさまざまな役割があります。かつては林業が盛んで「山持ち金持ち」と言われましたが、外国から安い木材が入ってきたため、日本の木材産業が維持できない状態になってしまいました。皆さんは国産材は高いと思われているかもしれませんが、高いのは人件費や輸送費であって、木材

自体が高いわけではありません。

しかし、京都議定書により森林がCO₂の吸収源として位置づけられたことにより、国も自治体も総力を挙げて全国の森林の間伐に取り組み始めたわけでは。

ところが、高齢化が進んだ集落では林業の担い手がいないため、都会に住む人たちが森林ボランティアとして活動に出掛けるようになりました。その方たちを取材した時、「山を守るため」とか、「田舎を守るため」といった発言を期待していたのですが、「汗をかいて一杯飲むのが楽しいから」とか、「青空が見えてきれいだから」とか……。気軽に明るく参加するから長続きするのですね。

もちろん、山に行けない方たちも応援をすることができます。例えば、間伐材を粉にして固めたペレットや、間伐材を燃料にして発電を行うバイオマス発電を利用したり、住宅に集成材や合板といった形で木を使うことなどです。

今日ご用意していただいた大豊町の碁石茶の容器。これはカート缶と違って一部に間伐材が使われています。

す。もしカート缶を見かけたら、これを1本買うことで田舎・森林のちょっとした応援になるのだと意識してもらえたら嬉しく思います。でも私たちはあくまで森林の応援団。田舎に住んで山を守ることができるようになることが一番重要です。

○目先の「量」にとらわれず、先を見据えた魅力づくりを

日本人に飽きられてしまった日本の観光ではいけないということ、地域は魅力づくりに頑張ってきました。それが10年20年経ってようやく光が当たってきたところです。そして、ここ数年、地方都市や田舎も含めて外国人観光客が多く訪れるようになって、日本の魅力を伝えることもできるし、頑張ってきた取り組みが日の目を見るようになってきたのは嬉しいことです。

一方で心配しているのは、大量に訪れる観光客により、ある一部の人たちは大きな利益を得ていますが、そこにあぐらをかき、便乗する傾向が見られることです。安易な姿勢を外国のお客様が見た時に何と思われ

るか。その点を私たちはしっかりと意識して、東京や自分たちの田舎も含めた魅力づくりに取り組み、外国の皆様をお迎えするようにしたいものです。

参加者からの反応

参加者の皆様からは、「実体験に基づくお話だけに具体的に面白かった」「観光地として見る前に、きちんとその田舎では生活ができていますか、そのために日本人として何ができていくかをハッとさせられた」といったコメントをいただきました。

● 全ての話に共通していたのは、「魅力的な風景の背景には、それを守る人の手や生業がある」ということです。生業として成立する要素が時代とともに変容していることを踏まえ、今の時代と地域の特性に合った生業のあり方と、多様な立場の人が関われる仕組みを作り上げていくことが重要ではないかと感じました。

(観光研究情報室 福永香織)